



学校法人
鎌倉女子大学

良寛さまの隠れん坊

い
らん
ぼ

学長になって初めて書いた『学園だより』の巻頭言は、良寛が愛した「和顔愛語」という話でした。読んで字の如し、日本人が心に留めておいてよい素敵なお言葉なので、毎年「建学の精神」の時間にも学生諸君に話すのですが、その折には決まって良寛という方の人となりについても話題にするようにしています。文化経験の落差が大きい時代、私達の世代が今のタレントを知らないように、若い世代の人達には耳にする機会さえなかった人かも知れませんから。

それでも、良寛が素晴らしい書や歌をたくさん遺していることをご存知の方も少なくないかろうと思います。「生き死にの 界 離れて 住む身にも 避らぬ別れの あるぞ悲しき」、そう語りかける愛弟子の貞心尼を諭すようにかすかに口ずさんだといわれる辞世の句など、覚りの身にも悲しみがつきまとう、その心もまた尊い真実と認めて、それらを抱えて世を生きる人の姿の美しさを詠う、如何にも良寛らしい歌とっていいでしょう。

うらを見せ おもてを見せて 散るもみぢ

一方、村で出会った子供達と遊ぶために何時も手毬やおはじきを袂に入れていたという、大変な子供好きだったということでも知られる人です。

子供時代の読み物の中に、こんな記憶があります。良寛が山寺に遊びに来た子供達と隠れん坊をしようということになり、子供が鬼になり、自分は隠れることになった。いい隠れ場所を見つけて、そお〜と息をひそめていたところ、果して子供達はそう簡単に見つけてはくれない。そうこうするうちに、ついコックリ、コックリ、すっかり眠入ってしまった、アツと気がつくと、西の空はもうすっかり夕焼け、子供達はみんな帰ってしまった。こういう可愛らしいエピソードです。

確かに、私が読んだ内容とまあ同じような逸話を伝えている本もあるので、これもそう遠からずだと思いますが、しかし本当はもっと傑作なエピソードであったことを最近父の書架にあった東郷豊治氏の『新修 良寛』で知り、へえ〜と、ちょっとビックリしたものです。

形見とて なにか残さむ 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉

日本の伝統的な自然観を背景に、四季のめぐりに融け込む人間の生死について、誰にも知られた言葉で、こんな味わい深い歌を遺すかと思えば、結構お酒好きで、かなり軽妙な句もまた遺していることから見ると、本当にそうだったのかも知れません。

ほろ酔ひの 足もとかろし 春の風

さて、件の隠れん坊ですが、高く積み重ねられた藁束を見つけ、いい隠れ場所だと潜り込んだ良寛の様子について、東郷氏は、こう書いていました。「鬼の子供らはいくら探しても良寛を見つけられない。遊び疲れた上に、日も暮れかかり、家々から夕餉の炊煙が空に立ち昇ったのを見ると、かれを置きざりにして、めいめいの家に帰ってしまった。そうとは知らぬ良寛は、いまに探しに来るであろう、いまに探し当てられるであろうと、待って、待って、夜通し待って、なんと明け方になってしまった。農家は朝竈に火を焚きつけるとき藁束をつかう。その藁束を取りに来た百姓女が良寛を見つけて、びっくり仰天。思わず、『アッ、良寛サ、こんな処でなにしておざる』と大声をあげたところ、『しいッ、子供に見つかると制したという話である」。

私の記憶の中にある話が本当にせよ、この逸話が本当にせよ、何れにしても深い思想をたたえながら、こんなに子供と屈託なく、しかも真剣に遊べる大人って、今でもどこかにいるのか知らん。それとも、江戸時代のこと、これも時代の為せる業ということか。

この里に 手毬つきつつ 子供らと 遊ぶ春日は 暮れずともよし

※この言葉の出典は、一世紀頃、北西インドで成立したと推定される『無量寿経』、特に阿弥陀仏（無量寿仏）の誕生秘話を物語る経典。

[>前のページへ戻る](#)